

連 載

新興国ウォッチ！ <第6回>

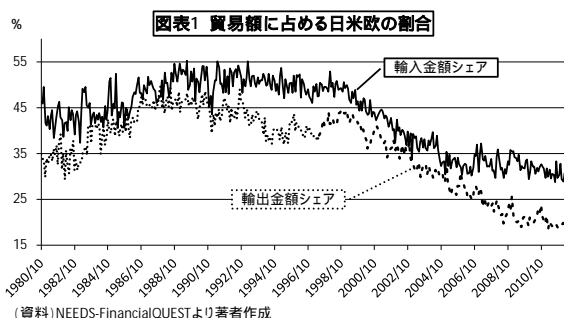
為替制度(6):シンガポールにおける通貨バスケット制

多田 忠義

シンガポールにおける為替管理制度

1981年、シンガポールでは「インフレなき経済成長の維持」を政策目標とし、その達成のための手段として、通貨バスケットに基づく変動相場制を採用した。為替相場の管理は、中央銀行の機能を併せ持つ MAS (Monetary Authority of Singapore) が運営し、相場の変動を為替バンド内に抑えるように市場介入を行う。そのため、同国の為替管理制度は「管理変動相場制」と呼ばれることもある。なお、シンガポールにおける貿易総額の対 GDP 比は、2010年で 297.56% と世界第2位で、貿易が同国の経済に与える影響は極めて大きく、MAS は為替の安定化に注力している。

MAS はシンガポールの貿易取引実績に基づいた比率で構成される貿易相手国通貨のバスケットを、シンガポールドルの基準為替相場として参照しているが、バスケットの通貨構成は、相場の安定化や投機的取引を制限するため非公開である。一方、三浦(2001)は、調査機関等が同国の通貨バスケット構成比を、米ドル 45%、円 20%、ユーロ 15%、その他 20% と推測している、と報告した。ただし、近年の日米欧の輸出入金額シェアは低下基調で(図表1) MAS は人民元等の他国通貨のシェアを高めている可能性がある。また、近年外資によるシンガポールドル買いが強まっているため MAS は為替介入し、このことが外貨準備



を増加させる一因である(図表2)。

通貨危機・景気低迷とシンガポール

1997年のアジア通貨危機では、多くの東南アジア諸国が米ドルペッグ制を採用していたために大きな影響を受けた。他方、シンガポールは比較的大きな影響を受けずに済んだ。これは、通貨バスケット制を採用していたことに加え、MAS が適切に為替相場を運営していたからだ、と赤羽(2012)や三浦(2001)は指摘している。また、ITバブル崩壊(01年)やリーマンショック等の世界経済の低迷(08~09年)でも、シンガポールの経済は短期間で回復した。ゆえに彼らは、同国の為替制度やその運営方法を高く評価し、将来の国際通貨制度を検討する上でも多くの含意があると指摘している。

参考文献

- 赤羽裕(2012)「シンガポールから考える通貨バスケットの特性」『日本国際経済学会第71回全国大会報告論文』http://www.jsie.jp/Annual_Conferences/71th_Konan_Univ/pdf/8-1_Akane_paper.pdf (2012年10月18日最終確認)。
- 三浦潔(2001)「シンガポールの通貨バスケット制度」14-22. 財団法人国際通貨研究所『通貨バスケット制実施国の実態調査』所収。

